

概 要 報 告

実 施 期 日	令和 7 年 8 月 5 日 (火)
部 会 名	小学校 特別支援教育部会

研 究 主 題

個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫

テ ー マ

『運動の楽しさを感じ、活動にチャレンジし続ける子の育成』

提 案 概 要

子どもは、様々な運動を経験することで神経系の発達を促すと言われている。特に 10 歳前後までの時期は運動能力が伸びる黄金期と言われており、この時期に運動することがその後の成長に大きな影響を与える。また、運動に対して前向きなイメージをもって育つと生涯にわたり運動やスポーツに親しむ傾向があるとも言われている。運動習慣をもつことは、心身の健康を維持すると同時に、人とつながることもでき社会参加にも寄与する。そこで、学校において運動の楽しさを感じさせ、生涯にわたって体を動かすことにチャレンジし続ける子を育成することが重要と考えた。基本的な体の動かし方を身に付けさせ、運動を継続できる体力もつけて欲しいとの思いをもって実践した。

活動は、週 2 時間の体育の授業や自立活動（毎日、15 分の朝の活動を含む）の時間を中心に行った。朝の運動は、通常級の 6 年生も一緒に活動した。

基本的な体の動かし方については、「幼児期に身につけたい 36 種類の基本動作」という文部科学省発行の幼児期・運動指針ガイドブックを参考にし、「跳ぶ」「走る」「投げる」動きに重点をおいて、授業づくりをしてきた。指導の方法としては、一連の動作を細分化し、動きのポイントの時系列に分けて、イラストや模範動作を示すことで体の動かし方を子どもたちに伝えていった。

投げる運動においては、「横向き」「指さし」「足上げ」「回転」という 4 つのポイントに分けて指導した。また、高い的に向けて投げたり、より早くより強く投げたりする練習によって、指さしや回転・体重移動を意識させた。半年の練習で動作の改善が見られ、多くの児童が飛距離を伸ばすことができた。

跳ぶ運動については、「手を下げてひざと腰を曲げる」「手を上にあげて跳ぶ」「手を下ろして両足で着地」という 3 つのポイントに分けて指導し、手の位置、ひざと腰の使い方を意識して跳ぶことで、体全体を使って体重移動させ、より遠くへ跳ぶことをねらいとした。5 カ月で動作の改善が見られ、半年後には両足跳びの距離が 10～30cm 伸びた。今後は、片脚跳び、高跳び、ハードル走、リズムに合わせて跳ぶ運動などに取り組んでいく。

走る運動については、「太ももを上げる」「歩幅を大きく」「腕を振る」という 3 つのポイントを示して指導した。朝の運動の「ランニング」で毎日取り組み、一定の速度を保ち、動きのポイントを意識することを大切にしたい。毎日走ることで、一定の速度を保ち集中して走る力が付いた。気温の高い日は、歩く活動に変えたが、太ももを上げしっかり腕を振ることを意識させた。こうした取り組みの結果、走ることへの自信が生まれ、運動会の短距離走へのモチベーションも高めることができた。

また、多様な動きを組み合わせたサーキット運動を行い、持久力の向上を図った。多様な動きという観点から考えると学校生活では日常的に様々な運動を行っていることに気付く。今後は、より児童の実態に即した手立てを検討し、児童自身が運動能力の向上を実感できるように「蹴る」「登る」など運動の種類を増やし、数年単位で継続的に活動に取り組むことを大切にしていきたいと考えている。

質 疑 応 答

子どもの実態について話せる範囲で改めて教えてほしい。

- ・とても活発でコミュニケーションが取れる児童が多い。
 - ・こだわりがあり体育が嫌いで、コンディションが整わないと取り組めない児童もいる。
 - ・一斉指示も通りやすい。
 - ・明るく助け合える集団である。
- 運動の時間、交流級の6年生と一緒にやる内容について教えてほしい。
- ・6月終わりから始めた（6回ほど）、特別支援学級で普段やっていることに6年生が参加する。
 - ・ラジオ体操、一人でするストレッチ、ペアで行うストレッチに取り組んでいる。
 - ・6年生が特別支援学級の活動を知ることができる、特別支援学級の子にとっても6年生の顔を覚えることができる。

協 議 の 柱 及 び 協 議 概 要

- ・運動の楽しさを感じるための手立てや指導方法の工夫について

【A グループ】支援を必要とする児童生徒は、一斉指示での指示だと理解に時間がかかってしまう生徒もいる。運動や体育は、個々の体力向上、グループでも二人一組で行うことが多く、そんな中で運動の楽しさを如何に伝えるか。「投げる」「跳ぶ」ができるとどう楽しくなるのかを伝えていく。遊び方が分からない子も多い。ただ遊具の周りを走っている子もいる。担任が言葉がけをして一緒に遊ぶことで楽しさを伝えていきたい。また、日常生活の中から運動の楽しさを伝えていけるように心掛けたい。

【B グループ】運動の楽しさについて考えた。記録が伸びたり、一緒にやったりすることで楽しくなるだろう。また、映像で比較してみると分かりやすくなる。チームで楽しむには、できることの幅があるので、2つに分けてそれぞれに合った指導を行い、最後にみんなで作ると楽しめる。「よかったね」「できたね」などの言葉がけも有効である。

ま と め 概 要

活動にチャレンジし続ける子の育成の実現に向けて取り組んできたことを授業提案された。運動が好きになってほしい。「やったあ、できた」を実感し、達成感、充実感を得られるようになってほしい。そんな願いをもって研究に取り組んでいた。体の様々な動きについて、動作のポイントに着目し授業実践をされ、その成果が現れていた。

児童一人ひとりの実態を把握し、指導上の課題を的確に把握するうえで、ICTの活用が効果的であることも見て取れた。チームで手立てを検討したり、子どもたちがポイントを確認したりするためにも有効な手段である。

また、授業を参観すると、授業の振り返りの時間を大切にしていた。その授業の中で「何を意識しがんばったのか」「何ができるようになったのか」を児童自身がきちんと振り返り、次の授業への意欲につなげていた。

一つひとつの動きを繰り返し同じパターンで練習すること、実態に応じたスモールステップで課題を示すことなどの工夫が大切であることが本研究で再確認された。

支援を必要とする児童生徒は、特別支援学級に限らずたくさんいる。より適切な支援にするためには、困り感に寄り添い、多面的に理解しようとする姿勢、多角的な視点をもった支援体制、すべての児童生徒をすべての教職員で支える体制を構築していくことが重要である。